はじめに

何か月も雪に覆われていた山々がようやく芽吹きの色を帯び、日に日に瑞々しさを増す今日この頃。日中は少し温かくなり、山吹の黄色や藤の紫色が優しく映える景色の中、通学路や山菜採りへ向かう子どもたちの足取りも軽やかです。

５月の連休には利賀の各地区で春祭りが行われ、留学生もそれぞれの受け入れ家庭の一員として、各地区の祭りに参加しました。獅子舞の練習では地域の方の優しさやかっこよさに触れ、本番では旗持ちや太鼓など役割をいただいて、歴史や祭礼、そして春の喜びを、身をもって感じられる機会となりました。利賀の自然と暮らしに学ぶ留学生にとって、この春祭りは鮮やかな原体験のひとつになっていくことと思います。多方面からのご配慮、本当にありがとうございました。

さて、先日は留学生保護者が利賀を訪れ、利賀小中学校及び保育園の運動会を参観しました。晴天の下、利賀っ子の一員となって生き生きと動きまわる留学生の活躍や、先生方・地元保護者・受け入れ家庭のお父さんお母さん・留学生保護者が一堂に会して子どもたちみんなを応援する温かな運動会は、私にとっても胸に迫るものがありました。感染症対策等、あらゆる場面で多少の制限が余儀なくされている昨今ではありますが、どんな時も逞しく成長していく子どもたちを希望に、日々の活動や節目の行事等、留学センターでもできる限りの形を実現していきたいと改めて思うところです。

松浦　実穂

【 活動カレンダー 】

4月

- ２３日　クリーン作戦、デイキャンプ
- ２４日　種籾蒔き、畑起こし、ホームステイ入り

5月

- ２日　センター入り
- ３日　よもぎ採り
- ４日　春祭り
- ５日　畑作業（畝立て）
- ７日　高峰山ハイク
- ８日　田起こし、畑作業（種植え）
- １４日　よもぎ餅大会
- １５日　小中合同運動会
- １６日　山菜採り、畑作業（じゃがいも植え）
- １７日　ホームステイ入り

〒939-2516　富山県南砺市利賀村坂上 18　南砺利賀みらい留学センター
TEL：0763-77-4103　　FAX ： 0763-77-4037
MAIL：nanto-toga-mirai@p1.tst.ne.jp
WEB：http://www.nanto-toga.com/

４／２３　デイキャンプ

今年度一回目のキャンプ活動です。午前中は小学生がセンター周辺を歩き、こごみやカタクリなど山菜を採ってきました。午後は中学生も合流し、２つの班に分かれて、かまどづくりと火おこし、炊飯をしました。説明を思い返し、教え合いながら、どちらの班もおいしいご飯を炊きあげていました。炊けたご飯に、午前中とってきた山菜の天ぷらを載せて晩ごはん。「もっと食べたい！」「ご飯がいちばんおいしい！」とお腹いっぱい食べていました。

４／２４　種籾蒔き

今年度最初に行う田の作業。育苗箱に土と燻炭を混ぜ、その上に発芽させた種籾を蒔くことで、田植えに使う苗を育てます。種籾を発芽させるために、これまでに留学生が当番制で朝晩の温度管理を行ってきました。

２人１組となって作業し、ふるいを使って土を入れるときや、入れた土を均していく時には、「もっと！もう少し！はい、オッケー。」と互いに声を掛け合いながら作業をしていました。

５／４　春祭り

３年ぶりの開催となる利賀の春祭りに参加させていただきました。ホームステイ先の地区に参加し、利賀の文化に触れる貴重な経験となりました。地域の練習に参加するたび、「曲を全部覚えたよ」「笛の音が出るようになったよ」と嬉しそうな子どもたち。お祭り当日に出番をいただけた子どももおり、緊張しながらもお祭りを楽しむことができました。帰ってきてからも、それぞれの地区の様子を熱く語り合っていました。

５／７　高峰山ハイク

自然を楽しみながら歩こう、と高峰山へ出かけました。まだ残っていた雪を触ったり、景色を眺めたり、タラの芽やコシアブラを探したり、自由に歩きながら頂上を目指しました。天気が良く、頂上からは堂々とそびえる立山連峰がくっきりと見え、「きれー」「あれが立山なんだ！」と話していました。景色を堪能した後は、『そこにあるもの・そこからの風景』をテーマにスケッチしました。「風景描くの難しいな…」「意外と描くの楽しい！」など様々な声が聞こえてきました。

５／８　田起こし

冬の間、硬くなった田んぼに鍬を入れ、土を目覚めさせていく作業です。雪解けが遅かったため、３週間遅れての作業となりました。

作業は大きく分けて鍬で土を耕していくチームと、田んぼの中の石拾いや肥料となる鶏糞を撒くチームの２つ。

午前中から夕方にかけて１日中の作業となりましたが、「疲れたらすぐに鍬交代するから言ってね～！」「もう少し！頑張ろう！」と互いに鼓舞し合って作業をしている姿がありました。

去年に引き続き、２回目の田起こしでした。地面が粘土質で、土が鍬についたり、雪の重みで土がすごく硬かったりして大変でしたが、留学生全員で交代し、協力しながらできたので、楽しく活動を行うことができました。　（樹）

５／１４　よもぎ餅大会

保護者来園行事として、親子でよもぎもちを作る活動を行いました。この日のために、GW 中によもぎ採りとその下処理をして、準備を進めてきました。

蒸し上がった餅米とよもぎが臼に入ると、「おぉ～いい香り！」と歓声が上がっていました。

当日は地元利賀の小学生も数名参加があり、たくさんのお餅をみんなでお腹いっぱい食べることができました。

５／１６　山菜採り

千束の里山を歩き、地元の方に教わりながら山菜採りをしました。良い天気の中、皆元気いっぱいで、「キノシタいっぱいある！」「すすたけとりたい！」と急な斜面や藪の中にもどんどん入り、山菜を採っていました。採ってきた山菜は、センターに戻ってから皆で調理し、うどんに載せる天ぷらや和え物にしました。「おいしい！」「おかわりある？」と、どの山菜も大人気でした。今回は地元の子どもたちも参加してもらい、一緒に楽しむことができました。

ただ山菜を採っただけでなく、調理をしたり、たくさんの山菜を知ることができた。山を登る道中、そこら中に落ちている石を踏んで足が痛かったし、雪が残っていて、その上を歩くし、崖は登るしでアウトドアスポーツのようで、体を動かせて楽しかった。　（哲平）

～ 雑草のようにたくましく ～

4/１７　苗づくり　4/２４　畑おこし　5/5　畝立て
5/8　種まき(インゲン・二十日大根など)
5/１６　ジャガイモ・苗植え(カボチャなど)

今年度の畑作業が始まりました。農作業は年間を通してできるだけ手作業で行い、食べ物をつくる大変さや収穫の喜びを体験します。畑おこしは根気のいる作業でしたが、皆で交代しながら鍬をふるいました。５月にはいよいよ種まきや植え付けを行い、その後は毎日係の人が水をやって、「芽出てるよ！」と成長を見守っています。

保護者だより

今年からお世話になっています小学三年生の寺﨑智康は、北海道札幌市出身です。

智康は、男三人兄弟の末っ子で、生まれは知床半島に近い中標津(なかしべつ)町。中標津は、玄関の扉を開くと牛のいい匂いがするところで自然豊かな場所でした。どこまでも続く平原。どんなに大きな声を出しても怒られず、エゾシカやキタキツネが近所で見ることが出来。車を２０分走らせれば、海から北方領土の国後島が見える環境でした。ですから兄二人は野生児のように育ちました。しかし、智康は１歳で札幌へ。全く中標津での記憶は有りません。自宅の近所に大きな円山公園や円山動物園などが有り、家庭菜園と出来るだけ自然と触れ合う生活をして来ましたが、すっかり都会っ子に成長しました。

昨年体験留学した時は、沢山の初体験をさせて頂き、智康の眼はとても輝いていました。富山から帰宅してからは、迷いもなく「留学する。」と宣言。親の不安をよそに、三番目の末っ子だけ有り、打たれ強く、環境に順応するのに長けているので、「可愛い子には旅をさせよ」という諺が有りますが、本人が決めた道を私たち親はただひたすら信じ応援するだけ。

それから今回南砺利賀みらい留学を希望した要因の一つに智康のDNAに富山との関りが有ります。智康の母方の高祖父（四世代前）松次郎は、富山県高岡市出身です。現在も高岡市に親戚がいます。次男坊として生まれた松次郎は、明治４３年に北海道開拓の一員として、１８歳単身で来ました。北海道がどんなに過酷な状況か知らず、しかし富山では生きて行けず、選択の余地は有りません。当時は馬中心の生活。開墾するにも苦労が絶えず、多くの人が命を落とした時代でした。その中でも生き残り現在、その松次郎のDNAを受け継いだ子孫は、北海道の中札内(なかさつない)村という小さな村で、４０ヘクタール（4km×4kmの正方形の大きさ）の畑でジャガ芋、豆、小麦、てん菜（砂糖の原料）などを作る畑作農家としてたくましく生きています。智康には、その道産子(どさんこ)DNAも加わり、利賀で過ごす一年間でどれだけ成長できるか家族で楽しみにしています。そして、これは母親の勝手な願望ですが、利賀の北海道宣伝大使として北海道の素晴らしさを多くの皆さんに伝えて欲しいと願っています。

一年間、利賀の皆様には大変お世話になりますが宜しくお願い致します。

くま爺のつぶやき・・・

はつうま前号で「一年間で子どもたちはどれほど変わるのか」ということにふれたが、四月下旬から五月中旬の子どもたちが畑や田んぼで土と格闘する姿をみて、大きな変化を確認、追記したい。昨年春は作業を始めて僅か十数分で「喉が渇いた」と水を飲みに行きなかなか帰ってこない。「虫がいる」と鍬を放り出し、「さぼるなよ」と子ども同士が険悪な雰囲気にもなったのだが、二年目は違った。粘り強く石を拾い、根気よく丁寧に耕やしている。指導員に指示されいやいや動くのではなく、何をすべきかを理解し働いているのだ。今年から留学した子も継続生の姿から刺激を受けた。この子どもたちの様子をみて「農の心、人をつくる」という長野県の山村留学センター前の看板を思いだした。昭和62年に育てる会がキワニス青少年教育賞を受賞、表彰されたことを形として残したものである。「自然を敬い、大切に守り、勤勉に働く農業の心を山村留学生にもとの願いを込めた」と山村留学創設者の育てる会青木孝安会長。これからも農業体験を山村留学のひとつの柱として大切にしていきたい。私事になるが河童の郷近くで畑（300坪）を借りて野菜づくりを始めた。投げ出さないように頑張らなければ…。

統括主幹　山本光則